青年教育施設の教育方法

——官僚制社会における社会化と青年教育の問題（II）——

上　杉　孝　實

Educational Methods in Youth Centres

——Socialization and the Problems of Youth Education in the Bureaucratic Society (II)——

Takamichi Uesugi

本稿は，「官僚制社会における社会化と青年教育の問題（I）」（奈良女子大学文学部研究年報第18号，1975年，63-89頁）に続くものである。前稿では，官僚制社会の価値として，〈地位達成〉と結びついた「規律遵守」，〈安定〉と結びついた「人間関係への適応」をあげ，共同体社会から官僚制社会に移行する場合，従来の主要価値である〈和〉を人間関係への適応に利用する一方，規律の確立が課題とされることを述べた。そして，相互依存的母子関係の強いところでは，組織に適合した行動様式が取得され難いことから，青年期に隔離主義的生活訓練が採用されることを示した。さらに，官僚制化は，青年の社会編入をおくらせ，編入後も底辺に位置づけることが多いこともあって，あそびを中心とした青年文化を成立させ，青年の脱組織傾向を強めることになる。このような動向に対して，学校外の教育の拡大による社会化の組織化が促進されるのであり，青年の家は，規律を強調し，情動的包絡をもたらすことによって，青年文化と官僚制文化のギャップを埋める機能を持つことを概略示したのである。

本稿では，青年の家に代表される学校外の青年教育施設の特徴的な教育方法を検討し，それらが社会の官僚制化の中で果たす機能について，青年文化論と関連させながら，分析を試みる。

1

人間形成・人間変革を試みる場合，単にパーソナリティの表層の変化にとどまらず，深層部分の変容があってこそ，成果は大きいものとみなされる。パーソナリティの構造はさまざまにとらえられるが，教育の観点から，認識—態度—性格としだいにパーソナリティの深い部分に近づくというようにおさえることができる。ここでいう「認識」は，事物を認知し，相互に関連づけて，あるまとまった考えを持つ状態を意味し，「態度」は，何らかの価値観に支えられた一定のかまえであり，行動傾向であるということができる。また，「性格」は，行動に一貫性を与える心理的特性と考えられる。認識は，おもに知識がかかわりをもって深められるものであり，態度は，知識もかかわるが，意志との関連が深く，性格は，意志とともに感情によって支えられている面が多いと見られる。もとより，認識に意志や感情がかかわらず，性格が知識と無関係であるのではない。相対的にいずれがより強く関連しているかということである[1]。

広義の学習は，行動様式の変化をもたらす試みを総称するが，狭義の学習は，知識の裏づけに

よって，認識の深化・変容をもたらし，人間形成・変革をめざすものである。変化に応じやすいパーソナリティの表層から変容を試みるものだけに，受け入れられやすい反面，変化への抵抗の大きい態度・性格の層までつながって影響を及ぼすには時間を要し，継続的とりくみを前提として初めてパーソナリティ変容が可能となることが多い。頭での理解が行動の変化と結びつかないことが少なくないのである。

もともと青年期は，社会的には，成人社会への加入手続＝イニシエーションの時期を原型とするものである。イニシエーションの儀式は，厳しい訓練や死・再生の象徴的なしぐさ，あるいは当該社会の世界観の伝授などによって，それまでの俗の世界からの分離をはかり，聖なるものに触れさせることによって成人社会への統合を試みるものであった。それは，学習の積み重ねというより，直接にパーソナリティの深層部分に働きかけて，人間変革をドラスティックに行うものであったといってよい。産業の発達のもとで，イニシエーションの時期はあいまいとなり，青年期はモラトリアムの時期という意味が強くなっていても，子どもの役割とおとなの役割にギャップがある以上，青年期における人間変革，子どもからおとなへの生れ変わりへの期待がなくなるわけではない。

宿泊型青年の家の多くは，非日常的な自然環境に恵まれた場に設けられることによって，多少なりとも俗の世界からの離脱を体験させる。一方，非日常的な施設であるだけに，利用期間も限られ，長期間継続を要する学習の場としては，限界が大きい。それゆえ，人間変革をめざす教育機関としての特色を発揮しようとするとき，短期間にその成果をあげるべく，認識の次元に働きかけるよりも，ただちに態度・性格のレベルに迫ろうとすることになり，知識を媒介とするよりも，意志・感情に焦点をあてた教育が志向されやすい。

官僚制化の進行の中で，青年の問題としてとりあげられやすいのは，認識の問題以上に態度・性格の問題である[2]。官僚制そのものが，理念的には，機能的合理性の観点から，認識の範囲を，目的に対して整合的な手段に限定しがちであり，没主観的な規律に服従する態度に重きを置き，うまずたゆまず感情中立的に規律に従って所与の役割を遂行する意志を重視する。官僚制の階梯の下部に位置づけられる者に対しては，一層このことが妥当する。

このような状況への対応として，青少年施策においても，狭義の学習に対して「青少年指導」の概念の比重が増し，その方法・技術としては，グループ・ワーク，団体指導・援助，カウンセリング，補導・保護活動，スポーツ，レクリエーション活動，文化・芸術活動，広報活動が掲げられ[3]，態度・性格を直接扱う方法・技術が中心を占める。青年の家の利用においても，これらの方法・技術が重視され，とくに，共同生活による教育を特色とすることから，態度変容の方法として，グループ・ワークが重要な位置を占めている。グループ・ワークは，興味に応じた小集団活動の展開によって，メンバーの相互作用を促進し，集団生活にふさわしい行動様式を身につけさせるのであり，さまざまの集会やレクリエーションはその重要な手段となる。これによって，青年文化におけるあそびは，社会生活に適合する行動様式の取得に導かれるのである。

しかし，グループ・ワークは，クラブ活動等に典型的に見られるように，日常活動において効果を発揮するものであり，それ自体として必ずしも非日常的施設の特色をなすものではない。また，グループ・ワークは，楽しみを出発点とする点において，当初から俗の世界における苦役に適応できる資質を培うものではない。官僚制における禁欲的役割遂行に適合した機能を示すとい

うよりも，その補償機能を果たすのであり，フォーマルな集団の非人格性をインフォーマルな集団の人間関係でカバーする H. R. (Human Relations) の技術と重なる面を持っている。H. R. の技術が隆盛を示し始めた1950年代に対し，60年代には，高度経済成長政策との関連もあって，より能動的な組織への献身が強調され，身近な欲求充足を離れても組織目標達成に貢献することが求められるようになる。青年の家においては，自然の利を生かして，青年の好むスキー，登山，カッター等を通じて集団訓練を施すプログラムを用意し，組織行動にとって望ましい態度の形成＝規律の習得をはかるのである。しかし，そのような体育活動を離れた組織行動にその成果がどのていど及ぶかが問題となる。

抑制のみでは，十分な献身を確保することはできない。表面の行動で適応を示しても，内面的には非同調に近い儀礼主義的同調にとどまることが少なくない。とくに70年代前後に高揚した青年文化は，自我の抑圧に対して衝動の解放を求め，自我と距離のある役割の遂行に努めることに拒否的反応を示し，脱組織傾向を顕著とするので，組織への献身を確保するには，感情を重視し，情動的包絡をはかる必要に迫られる。態度変容をこえて，よりパーソナリティの深層にある性格の変容にも直接つながる技法の採用が課題となるのである。

2

青年の家においてこそよくなし得る教育として提唱されるものの一つは，感受性訓練グループ (Sensitivity Training Group) に代表されるインテンシヴな集団体験である[4]。人間関係技術に強調点を置く T グループや，人格的成長と対人関係の発達・改善を強調する出会いのグループ＝エンカウンター・グループ (Encounter Group) などがある[5]が，限定された空間における数人から十数人の濃密な人間接触の中での自己表出と多くの場合それを促すトレーナーの刺激によって，自我の防衛機制をとり除いて，他者との深いつながりを体験し，他者との関係を通して自分を知ることが企図される。人間の成長のひとつを自己覚知に見出し，それを可能にするためには，ありのままの自己を受容できるだけの基本的な情緒的安定がなければならないとして，防衛機制の解除がはかられるが，それは同時に，その人でなければできないような行動を効果的に遂行する行動の柔軟性を体得することもねらいとされる[6]。

K. Lewin が示すように，アメリカ人によく見られるような周辺領域の境界は容易に他者を通過させるが中心領域のそれは厚いパーソナリティは，周辺領域は厚いが，その内部の境界への侵入は容易であるパーソナリティ[7]にくらべて，他者と近づきになりやすくても，真にうちとけた関係は樹立し難いと考えられる。大衆社会状況の中で孤独の不安がかき立てられることによって，感受性訓練を通じて心を開いたつながりが求められることになるのである。また青年文化は，他人と機能的でない関係を理想とし，それを達成する技術として，エンカウンター・グループの運動と結びつく面を持つことが指摘されているのである[8]。

日本人のパーソナリティ・モデルとしては，周辺領域の壁は厚いが中心部のそれは薄いものが考えられ，容易に他者とうちとけないが，親近状態にある他人には左右されやすいというように，自我の弱さが目立ち，自己監視を重荷とすることから，従来，自我の防衛機制をはずす近代的技術の開発よりも，共同飲食等を通じての情緒的一体化によって，結びつきがはかられてきた。にもかかわらず，今日感受性訓練への関心が高まっているのは，共同体秩序の崩壊に伴い，多少と

も中心領域に厚い壁を持つ自我が育ってきていることや，大衆社会状況の影響があると考えられるが，官僚制下の役割人間の拒否，脱社会・脱組織＝私的世界への閉じ込もりへの対応としての意味あいが強いことは，これらの技術が，企業で用いられることの多いことからもうかがわれる。

現実態としての官僚制は，特定の役割遂行のみでは満たされず全体としての人間的かかわりを求める個人の欲求を，集団への情動的包絡を通じて吸収しようとするのである[9]。これが官僚制の人格化ないしソフト化である。他者との暖かい関係を支える心と行動の柔軟性は，〈安定〉価値を強化し，人間関係への適応を内から促すだけでなく，極限状態でも主体的に行動できるを用意するものとして，厳しい規律にも耐え得，組織に献身する心情形成につなぐことが可能となる。つまり，それ自体では集団的とりくみの方向が問題とされないだけに，所与の方向に向けて貢献する結果を生み出しやすいのである。日本の企業において，心身の接触で個人間コミュニケーションをはかろうとするエンカウンター・グループよりも，集団のダイナミックス置いた T グループがよく用いられ，しばしば厳しい特訓のかたちをとりがちであるのは，な自己表出の習慣が乏しく，人間変革に必要な葛藤体験が避けられる傾向のあるために，強い刺激を与えようとするものであるが，企業間競争の中で，個人をナイーヴな状態にし，思考に先立つ行動を重視することと関係がある。

しかし，青年の家関係者たちには，このような近代的人間関係訓練を狭く浅いものと見て，人格完成への修養面を重視する立場がある。ここでは，教科学習に見られるように認識の変容を主軸にした“西洋的学習概念”に，知行合一，人倫を実とする“東洋的学習概念”が対置され，導者の人格的影響と共同生活に参加する者相互の切瑳拓磨によって社会的歴史的存在である人間としての個の自覚を促すことが主張される[10]。近代的人間関係訓練にくらべて，専門職員がより積極的に人格的影響を及ぼすことが期待され，団体の一員として，社会的存在としての個の自を促そうとするものであって，生活訓練的要素がより強く見受けられる。知徳体一体の教育が期されるが，知的学習をこえるという観点から，青年の家の定義と関連させて，「徳育と体育を一体とした心身一致の修養」[11]に力点が置かれることにな

感受性訓練が，近代主義的に機能の限定性の上に立っているのに対し，限定的で，価値の習得も含む教育の真髄として把握される。法・禅寺での修練方法が想起され，規律・説話等を通じ，全行動にわたって積極的な生活指導を行う。意志教育の性格が濃いが，情動を秩序行動につないで，態度・性格合わせての変容が企図されるのである。青年の家の特質は，人間解放の場としてよりも，「おのれにきびしく他に限りなくあたたかく生きようとするその生活のあらゆる機会と場において，その社会的歴史的存在としての個の自覚が培われる」[12]ところに見出される。感受性訓練のような，率直な相互表出による自我の防衛機制の解除ではなく，行為的立場で個の自覚を促すものであり，柔軟さよりも型の習得に導かれる。その禁欲性は，組織に適合的な意志と行動様式の獲得につながり，身近な欲求充足を離れても組織の一員として献身する姿勢を育てることになる。

このような行動のコントロールは，生の解放にウエイトを置く青年文化とのあいだにずれを生じさせることになる。しかし，パースナルな結合と人間の全体性の強調がそれをカバーす受性訓練にくらべ青年文化との連続性は弱いものの，アノミーの進行のもとでの一種の「規律飢餓」[13]には応えるものがあり，必ずしも青年を惹きつけないものではない[14]。感受性訓練も，宗

教に似かよったステップをふむことによって覚醒を促すが，自然の中での修養は，求道的要素を帯びて聖なる体験に連なり，成人社会との統合に寄与するのである。感情を意志のコントロールのもとに置くところに，感情そのものの一種のカタルシスをはかる感受性訓練との差異があるが，意志教育は団体精神と重なることによって，忍耐強い組織行動を保証し，自我包絡を導くのである[15]。

要約すると，グループ・ワークが，身近な欲求充足を通じ集団の統合に役立つのに対し，感受性訓練は，もっぱら統合次元に焦点をあて，修養は，集団の統合と目標達成の次元を結ぶことに貢献するのである。そして，グループ・ワークは，青年文化をきっかけとして用いるが，官僚制の補償的機能の面が強く，感受性訓練は，青年文化とつながりながら，人間関係への適応，組織への情動的包絡をもたらし得る。そして修養は，青年文化とは距離があるが，自己抑制の上に立って，規律遵守，組織への自我包絡を進めるというように，互いに補完関係に立つのである。

3

隔離的な共同生活による教育は，子どもに対し許容的で，子どもらしさに積極的評価の与えられる社会において，子どもの役割からおとなの役割への転換をはかる過程で重要な機能を果たす。このような社会では，子どもからの脱却は容易ではないので，厳しい団体訓練によって，依存性の延長線上に立ちながら，成人社会への統合のステップを得るのである。さらに，親子の密着状態が顕著なところでは，家族への固着を断ち切り，より広い社会に導くために，青年期において隔離的な共同生活体験を重視することになる。政策としての団体宿泊訓練を支える文化的背景が存在するのである。

しかし，早期からのしつけが重視され，青年期における訓練の厳しさが緩和され，また親子の分離が養育の理念として採られるようになる[16]と，必ずしも隔離を必要としなくなる。青年期にふさわしい活動として，クラブ活動等，あそびの要素やグループ・ワークの方法が多く採用されるのも，この動きに対応するものである。にもかかわらず，近年団体宿泊訓練が強調されるのは，組織や国家社会への包絡を進めるためであるが，上記のような社会化段階論のみでは青年を扱い切れなくなっている事情が関係している。

1960年代中頃までの青年文化論においては，社会化段階論的把握が強く，青年の社会への編入のおくれと地位の低さが問題であり，それに対する抵抗が青年文化をかたちづくり，成人と対等の力を得ようという志向が認められた。主として adolescent が問題とされるものであって，基本的な価値志向は既成社会のそれであり，下位文化としてのとらえ方が主流であった。60年代後半以降は，世代論的把握がより強くなり，社会への編入の拒否，役割猶予の“特権”の維持が青年文化を構成し，youth の延長が問題となる[17]のであって，社会の主要価値と対立することから，対抗文化としてのとらえ方がなされるようになっている。

このような対抗文化は，F. Musgrove が示すように，急激な経済成長のため社会的基盤に動揺の激しく見られる層によって担われるもので，疎外よりもアノミーに関連したものとして，歴史上にくり返し現われているという見方[18]もあるが，今日注目されるのは，“豊富社会”のイメージのもとに経済的欲求充足が主要関心事から後退することによって，技術の進展・管理社会化が，手段の目的への倒置をもたらし，人間を束縛するものとして目に映り，またそれに対抗する

価値を掲げる余地が生じることにもとづいたものであるということである。対抗文化を示す者が多数派を構成せず，むしろ一部の知識人・専門家子弟によく見られ，それほど社会的経済的に恵まれない層は，経済的関心や上昇志向によって，より実利主義的であることが指摘されている[19]。また，Radicals や反抗型にくらべ，Dropouts や脱出型は，柔構造体制の安全弁として放置される傾向がある[20]。しかし，対抗文化現象のクローズ・アップは，それを支える社会構造の存在もあって，一種の「自己実現的予言（self-fulfilling prophecy)[21]」に似た機能を果たし，社会的現実を構成して，それに対する政策的反応を惹き起こすことになる。

青年文化を下位文化として把握した場合，子どもからおとなへの役割転換に伴う緊張を処理し，究極的には成人社会への統合を助けるものとみなして，積極的評価を与えるならば[22]，その欲求を充足させるべく，許容的支持的態度でもって，自主活動を側面的に援助する方策が採られる。また，その際に，成人への従属からの離脱の象徴として，反価値的逸脱的行動の見られることに注目して，消極的評価を下すとき，治療的手法を用い，グループ・ワーク等を通じて“健全化”がはかられることになる。

これに対して，対抗文化として把握した場合，人間性に溢れた新しい社会の創造を志向する意識を見出して積極的評価を与える[23]ならば，その自立的青年運動を支援することになる。一方，脱社会・脱組織傾向に甘えや責任的役割からの逃避が見られるとして消極的評価を下すときには，社会的訓練の強化による社会参加の促進が企図される。青年の家の共同生活による教育の今日的意義は，ここに見出されるといってよい。

もとより，青年の家は，さまざまな青年を対象とするのであり，施設として自発的な利用を促すためにも，出発点としては，青年の欲求を重視し，多様な方法がとられる。青年の快楽志向への対応として，身近な欲求充足は自然への接触を通じて行われ，その中でのキャンプ・ファイヤー，ゲーム，ソング等のレクリエーション活動援助によって，連帯の強化がはかられる。それは，今日の青年は連帯感が弱いという考え方[24]に対応するものである。ここには情動の高揚が見られる。一方，自然と結びついた野外訓練を通じて，楽しみの健全化が試みられ，規律と接合される。青年を依存的存在と見[25]，その“甘え”の克服を拘束の中で期することになるのである。情動的連帯と規律を結びつけるものには，儀式の活用がある。朝夕のつどいほかの儀式によって，秩序ある一体感の高揚がはかられるのである。

規律が自己のものとして受容されるには，人格的影響を伴った鍛練としての修養が順機能を示すことになり，これによって全体への自我包絡が可能となる。また，連帯をパーソナリティの深層部において確立するものとして，感受性訓練が有効性を示し，同様に自我包絡をもたらす。現代社会における青年の不適応的パーソナリティの変容をなしとげようとするのである。かくて団体宿泊訓練は，青年文化と官僚制文化のずれを埋める機能を果たすのである。

ここでは，対抗文化の積極的評価は乏しい。対抗文化においても，欲求の充足と連帯をレクリエーションによってつなぐところは見られても，基本的には反規律的である。連帯に支えられた運動は文化変革に向かい，欲求充足を自由に遂行することで文化変革が達成されるとするのである。そこに青年の家の教育文化とのギャップがあり，それゆえ青年の家の生活指導は，まず，自然への接触と人間関係への関心を規律や自我包絡につなぐ儀式及び野外訓練に工夫をこらすことになるのである。

4

非日常的な場で営まれる共同生活が，現実社会の実態からかけ離れたものであるとき，そこでの成果は，地域社会に対する無視ないし高踏的批判にとどまり，これを真に変える力になり難い。昭和初期の塾風教育の多くは，道場至上の精神主義的生活訓練を行い，パースナルな結合を主としてカリスマ的指導者とメンバーの関係に集中し，行の教育の名のもとに知育を軽視することによって，地域の現実へのとりくみよりも，上長への情動的服従を通じて，国家を頂点とする官僚制への同調調達の機能を果たしたといえる。

これに対し，下村湖人は，成員間の横のつながりに重点を置いた協同生活訓練によって自治能力を形成し，地域社会人を育てることを眼目としている。共同生活は日常のそれに近いほど可とされ，道場の地域社会化が説かれる。友愛感情の深化と組織化とによる協同社会建設への実践的訓練が課題とされ，そこで養われる情操が道徳的意志を規定するとして，道場至上主義のもとで培われる衒気に満ちた意志の力にまさるととらえる[26]。情の洗練による意の規定に着目する点で，意による情の抑圧でもって意力の強化と見る他の多くの修養と異なる。指導者の役割は，共同生活に参加している成員の相互作用を促進し，成員自身で協同生活を営み得るよう環境を準備することであり，非指示的方法を多く採るのである。「愉快」の重視から見ても，グループ・ワークに近づいた修養となっている。

このような共同生活による教育で養われた心性なり行動様式は，地域生活に転移されるものとみなされる。地域の問題といった内容に先立って，自治という形式の転移が念頭に置かれるのである。その自治は，団体の成員が他の力を借りることなく自らの責任で秩序を維持し繁栄を図ること[27]であり，権力に対するコントロールというよりも自前主義の側面がクローズアップされる点，今日のコミュニティ政策における自治観ともつながる面がある[28]。

官僚制化は，権限の集中をもたらし，分権の上に支えられた地域社会の自己処理能力を弱める。しかし，これによって，官僚制は，重い負担を負い，増大する地域問題にかかわって生じる住民要求に対処しなければならなくなるので，経費の合理化と情動的包絡の確保の必要もあって，共同感情による統合と自前主義を中心としたコミュニティづくりが，官僚制の立場からも推進されるのである。対抗文化の側にも，冷たい機構と人間の手段視に対する反撥の結果，業績本位でない，自己実現をめざして人間全体を包み込むあたたかいコミュニティへの希求を見ることができる。それは，自発的結合から成る，機能未分化で大社会から一定の距離を置いた小さなコミュニティであり，現実の存続には困難が伴うものである。同時に，それらの多くは，社会改革よりも個人の成長を重視するものであって，心理的集団の性格が強く，集団への包摂は限られたものになりやすい[29]。しかし，政策においては，現実の地域社会にコミュニティの理念を重ねあわせることによって，コミュニティの基礎としての共同体感情（ocmmunity sentiment）[30]の高揚を通じて，社会への包絡がはかられる。エンカウンター・グループの運動は，表出的情緒的で親密な対人接触と個人の成長の促進を標榜する点でも，心理的コミュニティへの関心と共通のものであり[31]，共同体感情の高揚とつなぐことができるのである。

このように，共同生活による教育は，コミュニティづくりに資する面を持ち，統合次元に重点を置くコミュニティへの関心を操作することによって官僚制への貢献と結びつけることも可能で

ある。しかし，非日常的施設における“純粋培養”が，心情的にはともかく，現実に多様な層を含み，利害の錯綜した地域社会に直ちに適した行動をもたらすとはいえない。その効果は，日常的なものとの結びつきによって判定されなければならないが，その点でも，日常的生活圏にある都市青年の家，通常青年センターとよばれる青年教育施設の存在意義が問われることになる。

ユース・クラブ，ユース・センターの増設等に力点を置いたイギリスの1960年代の青少年施策への提言，アルブマール報告（Albemarle Report）に対して，これは，青年の独自性をあそびに見出す一方自立的存在とみなさず[32]，青年の隔離を生じさせ，社会への統合を妨げている[33]という批判がある。そして，70年代のユース・ワークのあり方としては，「変動社会の中で自己の位置を創造するよう若者を援助すること」があげられ，その目標は，「コミュニティへの批判的包絡」であるといわれるようになる[34]。青年の独自性を認める「孤立なき隔離（insulation without isolation)」の考えがコミュニティとの分離に到らないように，実際的方法を工夫することが重要とされ[35]，青年に対して，許容と支持と共に「援助への要求（calling for help)」がなされる必要が説かれる[36]。高度産業社会の青年の脱社会傾向に対して，「社会参加」が唱導されるのである。

社会参加の方法の中心に位置づけられるのは，「奉仕」である[37]。青年は，官僚制のもとで底辺に位置づけられることが多く，「決定」の段階での参加は限られてくる。他方官僚制の機能的合理性にもとづく形式的処理は，人間そのものを問題とする福祉・教育面においてなじまないものとなり，官僚制業務の周辺的役割遂行をボランティアに依拠することになる。この仕事は，全体としての人間を志向する青年にとっても関心を持ち得るものであり，感受性訓練の中味や修養の目的にもつながる。また，このような奉仕は，自前による処置すなわち自治能力の発揮というとらえ方にもつながって，青年の家等の共同生活による教育との結びつきが見られる。興味を出発点としながらその活動を社会的有用性に結びつけるグループ・ワークにおいても，奉仕は主要な位置を占めるが，重要な社会問題については，責任問題を考慮することによって，成人は青年に対して許容的であり得ず，本来許容的で client-centered である方法と矛盾する面が出てくる[38]。

社会奉仕の問題点は，F. Milson によれば，安価な労働力としての使用，中間層的発想による同情主義，年長者による決定，政治的行動よりも所与の社会の受容の四つにまとめられる[39]が，自発性が操作されていると受けとられると，青年文化とのずれが大きくなるので，奉仕を修養の一環とすることで対応策が講じられることになる。

5

青年文化は，青年の家などの生活訓練を通じて奉仕をはじめとする「社会参加」に導かれ，成人社会への統合がはかられる一方，青年の芸術等文化に対する関心は，文化活動の展開となって現れ，青年センターなど日常的生活圏の青年教育施設は，その機会の提供を通じて青年の組織化をはかるのである[40]。

R. N. Bellah によれば，日本では，政治的価値に重きが置かれ，集団目標達成への貢献が価値の中心的位置を占めてきた。これに対し，文化的価値は，一つには，中心価値としての政治的価値に密接に従属するものとして位置づけられた。修業・学問・研究は行為の手段として評価さ

れたのである。もう一つは，中心価値の補足とそれからの分離のかたちで，境界を設定した上で，審美的・情緒的価値をそれ自体目的として位置づけることが行われたのである[41]。これは，集団の役割遂行に対する要求の高さからくる不安の制禦という機能を持ち，そこから几帳面さが現れ，茶華道に代表されるように「道」になりやすく，修養に近づく。政治的価値よりも統合的価値の割当てられる傾向のあった女子にあっては，人間関係調和保持の手段として審美的情緒的価値が利用され，個別主義的規制の多いこともあって，おけいこごとが盛んになる。しかし，男子にあっては，中心価値である政治的価値とそれに従属する統合的価値を結びつける団体訓練が重んじられたのである。

敗戦による政治的価値の下降は，集団目標に対する義務の履行という限りで尊重されるものであった勤労の価値をも引きさげる。また，高度経済成長のもたらす環境破壊などのひずみと物的欲求のあるていどの充足は，経済的価値を低める。文化的価値の相対的上昇が見られることになり，とくに集団への包み込みの少ない青年にこの価値が担われることになるのである。ただし，かつて政治的価値に結びついていた学問・研究・修業は，学歴社会との関連もあって，依然として手段視されやすい。これに対して，審美的情緒的価値が浮上を示すことになる。あそびへの傾斜もその現れであるが，日本においては，元来経済的価値が優位であった欧米諸国ほどの仕事への反撥は強くなく，趣味に生きることと仕事志向とは見かけほど離れていないこと[42]や，モラトリアムの期間の長いこともあって，年長になるにつれ，少なくとも表面的には実用や修養との結びつきを示すことで，その正当性を得ることになる。おけいこごとをはじめとする文化活動にその例は少なくない。

官僚制化の進行は，個人主義的業績と結びついた経済的価値よりも，政治的価値＝集団目標達成への貢献を前面に出すことになり，団体訓練の強調が見られるようになるけれども，かつてほど強く文化的価値がそれに従属するまでに到らず，青年教育においても文化活動が相当の位置を占めるのである。

対抗文化の中で青年の遊戯化傾向は顕著になる。あそびは，俗の世界を相対化し，自律性形成の可能性を与える[43]が，隔離されることによって，一種の安全弁にされたり，アイデンティティ拡散に終ることも少なくない。これに対し，文化運動のかたちをとって，既成の文化とトータルなかかわりを持ち，その変革と創造をめざすとき，一定の衝撃を社会に与えることになる。しかし，それが反政治，文化至上主義のかたちをとるときには，人間性無視の政治に対する強い批判を示しながらも，現実の政治に操作され，体制にくみ込まれることも少なくない。

文化運動を担うサークルは，強い目的意識と同志的結合を特徴とする。文化運動を強い人間的結合が支え，目的を同じくする活動を通じて相互の絆が強化される。しかし，その過程において，結合そのものの目的化も現れる。大衆社会状況下のサークルの噴出は，サークル概念の拡大をも伴って，目的意識性よりも自然発生性をその特質と見て，情緒的結合を第一の機能として注目する傾向も生じる。また，サークルの目的意識性を狭くとらえて，近代主義的観点から集団の機能を特定分野に限定するとき，部分的役割の遂行が中心になって，官僚制と似かよったものになり，成員の人間的欲求を満たさず，社会的機能としても衝撃を及ぼすことが弱いものになり，しばしば組織化の手段として官僚制に包摂されることになる。

一方，目的意識を明確にしながら包括的機能を果たし，重要な生活問題・社会問題にとりくむ

中で，さまざまな成員の欲求に応えるグループを内部に創出しながらこれを包含するサークルは，文化の内実を問う共同生活を展開することによって，自立的社会的存在への人間成長を助ける。ここにサークルと青年団の接近が見られ，あそびは，このようなサークル形成を通じて，青年文化運動に導かれるのである。

6

青年文化運動が，成人社会と分離し，非現実的なものに終らないためには，現実とのかかわりを注視し，変革の方向を歴史的社会的に見きわめることが必要になる。現実認識を社会法則や自然法則の上に立って深める学習が求められるのである。学校外の青年教育施設はこのような学習の場でもあるという認識はある[44]が，学校と異なった機能に重点を置き，補完関係にあるとして，学校の“知識偏重”に対し全人教育を標榜する中で，徳育ないし社会的陶冶に傾斜していくことが多い[45]。在学青年の増加に伴い，学校との機能分担の名のもとに，この傾向は強められる。

社会の官僚制化と並行して学校の官僚制化が進み，点数による評価，知識量による人間評価，学校の存在そのものの目的化，学歴による人的配置等が強まることによって，別の場で集中的に人間的接触をはかるとともに，何らかの啓示なり聖なるものの体験による覚醒によって，疎外感の克服を試みる必要に迫られる。これに適した機能を果たすものとして団体宿泊訓練が行われ，青年の家における高校生研修の増加がはかられるのである[45]。しかし，これは学校そのものの改革ではない。知育と徳育の異なった機関での分担は，官僚制に伴う「機能的自律性（functional autonomy)」の進行のもとで，接合され難くなりやすい。一般に，学校にくらべても社会教育機関の官僚制からの自律の保障は乏しいので，自由な教育の展開には限界がある。

官僚制のもとでの認識は，分節化したものになりがちである。部分的パースペクティヴが全体的パースペクティヴに代り，政治の問題は行政の問題とされる[47]。「専門」価値の重視のもと，専門家は，機能の限定性の上に立って技術的卓越性を発揮し，官僚制からも素人からも自律的であろうとするが，役割に専念する点において，結局官僚制に適合的になる。「専門」価値は中上層部で採用されるのに対し，下層では，課せられる役割への対応として，私的領域と公的領域の使い分けを行い，「人間関係への適応」価値がこの二つのあいだに橋を架けることになるが，このような二分法自体官僚制の認識様式（cognitive style）である[48]。

対抗文化は，この認識様式に，全体的な生命体験，素朴さ，開放性を対置するが，役割に密着した専門＝部分的認識の否定は，主観性・情動の強調と相まって，認識そのものの軽視に到りかねない。人間性をすべて情動性に還元することは，社会の維持そのものを困難にするので，何らかの力でもってその統制が行われる。一つは，聖なるものへの情動的包絡でもってコントロールをはかるもので，宗教はその例であり，もう一つは，没主観的論理でもって制禦するもので，認識にかかわるものである。前者は，情動による情動の制禦であり，同じ基盤に立つため強い力を発揮するが，緊張も大きく，むらが生じやすい。近代的人間関係訓練や修養は，世俗化の中で宗教に似かよった機能を果たすだけに，同様の結果を招きねすい。しかし，元来宗教の中ではぐくまれた禁欲的態度は，情動に対して，没主観的論理に通ずる機能を持っている。

「当然のものとされた社会のルーティンの外に立たしめる行為」[49]であり，「その外側の位置からくる鋭くとぎすまされた認識と再編成されたパースペクティヴ」[50]は，「脱自（ecstacy)」と

よばれる。それは，現状をこえる理念であり，「自己距離化（self-distantiation)」と関係するもので，真の「教養（cultivation)」に必須の要素とされる[51]。A. C. Zijderveldは，社会制度や人間の情動性と非合理性のいずれをも自明のものと考えることを拒否する合理性を「知的禁欲主義（intellectual asceticism)」と名づけ，これは ecstacy を重要な構成要素とするものであるという[52]。これによって，神秘化に溺れずに人間の状態を直視できるのである[53]。このようなパースペクティヴを得やすいのは，既成の秩序に埋没しない層である。マージナルマンの立場もその一つであり，青年の立場もこれに含めることができる。しかし，同時に，このような意識の解放には自由の保障が前提となり，また，現実との緊張的接触の行われる場での共同生活に支えられて，認識の深化の見られることが必要となるのである[54]。

科学的認識が生活体験と結びつくことは重要であっても，共同生活から直ちに科学法則の理解が進むとはいえない。生活課題の学習課題化，学習の実践化にとって共同学習は有効であるが，問題の根底にあるものに迫るにはそれで十分ではない。また，共同生活そのものが人為的に理想的環境を設定したものである場合は，リアルな生活認識が得られにくい。共同生活による教育は，学習を集中し，学習の過程において多様な考えに触れ，人間的結合によって認識の深化と態度・性格の変容をつなぎ，学習成果の定着をはかることで積極的機能を果たすものなのである。

教育の総合的性格からも，学校が，地域に根ざし地域に開かれた共同生活教育の場となるとともに，価値にかかわる教育の特性にもとづき，官僚制的専門性をこえて，住民が専門職員の助力を得て運営し，官僚制からの自律性を示す青年教育施設において，生活課題にとりくむ学級，それを科学的法則と結合する講座・セミナー等による充実した学習の展開が求められるのである。日常的生活圏の青年教育施設にも宿泊施設は必要となる。宿泊型青年の家の意義は，日常の教育文化活動の集約に見出されることになるのである。

以上を要約すると，青年文化のあそびは，訓練を通じて，依存的存在のままではあるが成人との統合を示す奉仕等社会参加に導かれ，さらにイニシエーションの手続きを通じて自立的存在として責任的役割を遂行する立場に置かれる。別に，あそびは，サークルの形成を通じて，成人との分離は見られるが自立的である青年文化運動に結びつけられ，学習によって現実認識を深め，世代をこえたつながりに到って，成人との統合が進められる。問題は，前者の場合，今日ではイニシエーション儀礼の社会的位置づけが不鮮明であること，とかく情動的一体化に終って，官僚制をこえるリアルなものの見方を育てるのに不十分であることである。後者の場合は，サークルの部分的機能集団化により，単なる情緒集団・趣味集団と化して，官僚制にくみ込まれることの少なくないこと，学習の形式化，知識中心の官僚制教育化の可能性のあることである。青年期教育において，科学教育と人格教育の統合が，総合的で自律的な教育の場で行われることが課題となっているのである。

註

1) 青井和夫は，パーソナリティの構造を意見—態度—性格—気質の層と知識—意志—感情の層の組み合わせで示している。（清水義弘編，日本教育の社会的基底，国土社，1957年，275頁。）ただし教育の立場からは，可変性が乏しい「気質」は，行動の規定要因としては重視されても，働きかけの対象となることは少ない。もとより認識に無関係に態度・性格の変容が行われるものでなく，また認識は性格・態度によって左右される面を持つ。

2) たとえば，「現代の青年は自主的・合理的であり，かれらのもつ創造的な価値形成への意欲は高く評価されなければならないが，また一面においてきわめて現実的・物質的さらには感覚的・享楽的な意識傾向が一つの問題として指摘される。」(社会教育審議会答申，急激な社会構造の変化に対処する社会教育のあり方について，1971年。)

3) 財団法人青少年問題研究会編，青少年指導者入門，1973年。

4) 諸岡和房，社会教育・東と西，全日本社会教育連合会，1969年，51頁。

5) インテンシヴな集団体験に対する関心およびエンカウンター・グループについては C. R. Rogers, *Encounter Groups*, Penguin Books, 1973.

6) 諸岡和房，「生涯教育の考え方」，村井実・森昭・吉田昇編，市民のための生涯教育，日本放送出版協会，1970年，68—72頁。

7) K. Lewin, *Resolving Social Conflicts*, Harper & Brothers, 1948, pp. 20–25.

8) P. L. Berger, B. Berger & H. Keller, *The Homeless Mind*, Penguin Books, 1974, p. 186.

9) ある感受性訓練の体験者は，次のようにとらえている。「それ〔企業という組織体〕が企業目的の能率的遂行を第一義とするかぎり，しばしば個人の要求と矛盾し，対立し，長い目で見て企業目的の実現をさまたげている。そこで，下位水準にある非形式的集団から始めて，人間関係を全体として調整してゆこうという認識がでてくる。」(〔 〕筆者)(佐藤三郎編著，人間関係の教授法，明治図書，1969年，53頁。)

10) 花岡博，「国立大雪青年の家管理運営の方針」，国立大雪青年の家，青年の家とその教育志向，1971年，3—13頁。

11) 前掲書，4頁。

12) 黒沼友一「国立大雪青年の家の教育志向」，国立大雪青年の家，前掲書，22頁。

13) 石田雄，日本の政治文化，東京大学出版会，1970年，140頁。

14) 青年の家の利用者の肯定的反応については，国立大雪青年の家，前掲書，46—48頁。大阪府教育委員会月報，第297号，1974年，24頁。ただし肯定的反応も多い一方否定的反応の中では規律の厳しさを理由とするものが最多数である。(国立淡路青年の家所報，第6号，1975年，26頁。)

15) 青年団の提唱者とされる山本滝之助は，青年団を意力鍛練の機関ととらえ，情に支配された群衆心理にしつけを加えて，質実剛健の精神を養うところに意義を見出している。(山本滝之助全集，山本滝之助氏功労顕頌会，1931年，96—97頁。)「団体精神の作用する所に意力教育が行はれる」(前掲書，106頁。)「学校の不得手としている意志方面は，青年団にあっては，其の最も得意としている訳なのである。」(前掲書，446頁。)

16) 拙稿，「養育観の分析—社会化の連続性の問題—」，日本教育社会学会第27回大会発表要旨集録，1975年，66—67頁。

17) F. Musgrove, *Ecstacy and Holiness*, Methuen, 1974, pp. 6–9, pp. 92–100.

18) *Ibid*, p. 14, pp. 40 ff.

19) K. Keniston, *Youth and Dissent*, Harcourt Brace Jovanovich, 1971, pp. 327—335.

20) 二関隆美，「青年文化の問題——青年社会学のための序説——」大阪大学人間科学部紀要，第1巻，1975年，239—246頁。

21) R. K. Merton, *Social Theory and Social Structure*, The Free Press, 1968, pp. 475–490.

22) cf. T. Parsons, *The Social System*, The Free Press. 1964, p. 305.

23) cf. C. H. Reich, *The Greening of America*, Random House, 1970, pp. 217 ff.

24) 成人各層に対して青少年観を調査した結果については，兵庫県，青少年育成基本構想，1974年，125頁。

25) 成人層に，刑法年齢引下げ，男女交際制限，家庭責任強調，青少年に対する厳しい団体訓練等に対する肯定的反応，選挙権行使年齢引下げに対する否定的反応が見られる。(兵庫県，前掲書，127—128頁。)

26) 下村湖人全集6，国土社，1975年，43頁以下。

27) 前掲書，190頁。なお，下村の先輩である田沢義鋪は，団体自治として団体自営主義，公民自治として名誉職主義をあげ，江戸時代の五人組に自治の精華を見る。(田沢義鋪選集，財団法人田沢義鋪記念

会，1967年，265頁。）また，山本滝之助は，自治の精神として，自主自営の精神，奉公犠牲の念慮，協同一致の心懸をあげる。（山本滝之助全集，442頁。）

28) たとえば，地方制度研究会，新コミュニティ読本，ぎょうせい，1977年，19頁参照。

29) R. M. Kanter, *Commitment and Community*, Harvard University Press, 1972, p. 167.

30) R. M. Maclver & C. H. Page, *Society: An Introductory Analysis*, MacMillan, 1950, pp. 9–10, pp. 291–296.

31) R. M. Kanter, *Idid*, p. 8, p. 38, p. 55, p. 166.

32) F. Musgrove, *Youth and the Social Order*, Routledge & Kegan Paul, 1964, pp. 11–13.

33) *Ibid*, pp. 154–155.

34) Department of Education and Science, *Youth and Community Work in the 70 s*, H. M. S. O., 1969, p. 55.

35) F. Milson, *Youth in the 1970 s*, Routledge & Kegan Paul, 1970, pp. 68–73.

36) F. Milson, *Youth in a Changing Society*, Routledge & Kegan Paul, 1972, p. 109.

37) たとえば，青少年問題審議会，青少年と社会参加（意見具申・中間まとめ），1978年　参照。

38) B. D. Davies & A. Gibson, *The Social Education of the Adolescent*, University of London Press, 1967, p. 105. F. Milson, *Ibid*, p. 115.

40) 日常的生活圏の青年施設においては，未組織青年の出会いと社交の場の提供に重点が置かれる。しかし，必ずしも未組織青年にはじめから出会いについての要求が見られるわけではない。(vgl. H. Schelsky, *Die skeptische Generation*, Diedrichs, 1957, S. 473–474.) それゆえ，青年の興味をひく活動を媒体として組織化がはかられる。

41) R. N. Bellah, *Tokugawa Religion*, The Free Press. 1956, 堀一郎・池田昭訳，日本近代化と宗教倫理，未来社，1962年，32頁以下。

42) 生活態度として「金や名誉を考えずに自分の趣味にあったくらし方をする」を過半数の青年があげているが，生きがいを感じるときとしては，有職青年では，「仕事に打ち込んでいるとき」が「スポーツや趣味に打ち込んでいるとき」を上まわっている。（総理府青少年対策本部，青少年の連帯感などに関する調査，1970年，1975年）。また，他国にくらべ人生目標として「やりがいのある仕事」を選択する青年が多い。（総理府青少年対策本部，世界青年意識調査，1972年。）

43) 井上俊，「青年の文化と生活意識」，日本社会学会編，社会学評論，第22巻，第2号，1971年，42頁。

44) たとえば，「青年の家は，青年自身が集団生活を通じてインフォーマルな教育作用を十分発揮できる青年のための施設であると同時に，青年の認識能力を発展させるための教育的な働きかけを行う教育機関であるということができる。」（佐藤信一，「青年の家の現状と課題」，小川利夫編，現代公民館論，東洋館，1965年，169—170頁。」

45) 「心身の鍛練と規律協同の精神を養うための青年の家等の施設の整備拡充を図ることが大切である。……学校における教育が，ともすれば知識偏重となり，その全人的教育の面でじゅうぶんでないと指摘されているおりから，これらの在学青年の学校外における各種の団体活動や青年の家利用などによる社会的陶冶の場の拡充を図る必要がある。」（社会教育審議会，前掲答申）

46) 1971年度から国立青年の家で高校生の宿泊研修及びそれに関する指導者研修を計画，大阪府立青年の家でも，1974年度に高校生教養講座を行い，1976年度から在学青年の受け入れを始めた。

47) K. Mannheim, *Ideology and Utopia*, Routledge & Kegan Paul, 1960, pp. 105–106.

48) P. L. Berger *et al.*, *Ibid*, pp. 186–191.

49) P. L. Berger, *Invitation to Sociology: A Humanistic Perspective*, Penguin Books, 1966, p. 157.

50) F. Musgrove, *Ecstacy and Holiness*, Methuen, 1974, p. 197.

51) K. Mannheim, "The Democratization of Culture", K. H. Wolff (ed.), *From Karl Mannheim*, Oxford University press, 1971, pp. 339–340. Mannheim によれば，民主化はあらゆる対象の距離の縮小を意味するが，社会的距離の縮小は，それぞれの存在を真にユニークなものとしてとらえることを可能にするというように，冥想にふける神秘主義や観念的な人主文義とは異なったかたちで，自己距離化が達成できる。(*Ibid*, pp. 340–346.)

52) A. C. Zijderveld, *The Abstract Society*, Penguin Books, 1974, 民安正訳, 抽象的社会, ミネルヴァ書房, 1976年, 244頁。

53) P. L. Berger, *Ibid*, p. 171.

54) このことなしには, マージナルマンの立場は, 現実遊離の理想を設定することによって, 結果は幻想に終り, その失望から現実埋没に陥るか, 権力によって操作されることになりがちである。この点で最も社会的距離の撤廃を必要としている層を基盤としたときに, 現実に根ざした脱日常的パースペクティヴを得る可能性が大きい。